

## 主な製品の売上高の状況と見込み

製品名	当第2四半期 売上高(実績) (億円)	対前年同期 増減率	2021年度 売上高(実績) (億円)	2022年度 売上高(見込み) (億円)	対前期 増減率
オプジーボ点滴静注	699	24.6%	1,124	1,550	37.8%
フォシーガ錠	264	68.8%	367	470	28.2%
オレンシア皮下注	125	11.0%	229	230	0.5%
グラクティブ錠	117	△8.0%	245	230	△6.3%
カイクロリス点滴静注用	44	6.5%	84	90	7.6%
パーサビブ静注透析用	43	△5.3%	89	80	△9.9%
ベレキシブル錠	41	43.4%	63	70	11.7%
オンジェンティス錠	24	156.1%	29	50	73.6%
オノアクト点滴静注用	21	△9.6%	49	45	△7.6%
オパルモン錠	23	△5.9%	47	35	△26.0%
ビラフトビカプセル	16	21.8%	27	35	27.4%
メクトビ錠	13	17.5%	22	25	11.7%
オノンカプセル	12	△35.3%	36	25	△29.7%

## 「オプジーボ<sup>®</sup>点滴静注」、新たな効能・効果の承認を取得

抗悪性腫瘍剤「オプジーボ<sup>®</sup>点滴静注」について、効能・効果が拡大されました。

日本では、2022年5月にヤーボイ（一般名：イピリムマブ）との併用および化学療法の併用による根治切除不能な進行・再発の食道がんに対する承認を取得しました。なお、食道がんにおいては、2020年2月に二次治療について、2021年11月には術後補助療法についても承認を取得しています。

台湾では、2022年4月、尿路上皮がんにおける術後補助療法に対する追加承認を取得しました。また、2022年5月には、カボザンチニブとの併用による未治療の進行腎細胞がんに対する追加

承認も取得しました。また、2022年7月には、以下の2つの併用療法による進行または転移性食道扁平上皮がんの一次治療に対する効能または効果の追加承認を取得しました。

- ① オプジーボとヤーボイ（一般名：イピリムマブ）点滴静注液との併用療法
- ② オプジーボとフルオロピリミジン系およびプラチナ系薬剤を含む化学療法との併用療法



国内で承認されたオプジーボの適応がん腫（2022年9月時点）

悪性黒色腫	がん化学療法後に増悪した治癒切除不能な進行・再発の高頻度マイクロサテライト不安定性（MSI-High）を有する結腸・直腸がん
切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌	
根治切除不能又は転移性の腎細胞がん	根治切除不能な進行・再発の食道がん
再発又は難治性の古典的ホジキンリンパ腫	
再発又は遠隔転移を有する頭頸部がん	食道がんにおける術後補助療法
治癒切除不能な進行・再発の胃がん	原発不明がん
切除不能な進行・再発の悪性胸膜中皮腫	尿路上皮がんにおける術後補助療法

## 「オノアクト<sup>®</sup>」、小児の心機能低下例における頻脈性不整脈の効能・効果を取得

2022年8月、短時間作用型 $\beta$ 1選択的遮断剤「オノアクト<sup>®</sup>」について、小児の心機能低下例における頻脈性不整脈（上室頻拍、心房細動、心房粗動）に対する効能または効果の追加承認を取得しました。小児では体格や年齢によって、非薬物治療が困難な場合があることから、薬物治療が重要かつ主たる治療手段となりますが、国内で小児適応が認められている抗不整脈薬は限られており、オノアクトが小児の心機能低下例における頻脈性不整脈の新たな治療選択肢になるものと期待しています。